

市民のつどい2017・ふれ愛講座「太田恭治さん講演、来世楽(らせら)コンサート」(概要)

新宮市では平成 29 年 11 月 3 日、蓬莱体育館において「市民のつどい 2017・ふれ愛講座」を開催しました。まず、「日本の三味線は被差別民からはじまる」をテーマに元大阪人権博物館学芸員であとりえ西濱代表の太田恭治さんが講演。次に、「感謝の心で奏でる津軽の響き」をテーマに女性 2 人の津軽三味線ユニット「来世楽(らせら)」が唄と演奏を披露。来場された約 450 人の皆さんは、人権講演や迫力満点の津軽三味線の演奏を堪能した。

また、アンケートも実施し、約 62%の方からご協力をいただきました。その中では、「三味線、お話もとてもすばらしかったです」「講演の内容、話し方、大変よかった。シャミセンさすがプロ、酔いしれた」「元気を頂きました。最高のプレゼントでした」などの感想が寄せられています。詳しくは、一覧表のアンケート欄をクリックしていただくと、アンケート集計結果の PDF ファイルがご覧いただけます。



三味線を通し人権について語る太田さん

最初に、太田さんは、三味線は沖縄から始まったと言い、三味線は沖縄の三線からとして、日本の伝統和楽器の三味線は、室町末期に琉球から堺の港を通して日本にもたらされたもので、こうした楽器の演奏者、革の作り手はみな被差別民だったことはあまり知られていないと説明。さらに、日本で最初の演奏者は琵琶奏者の盲人であり、やがて庶民に広まった。また、沖縄ではヘビの皮を中国から輸入し生産していたが、堺に入ってからタンパク源として隠れて食べられていた犬や猫の皮で作られるようになった。また、三味線の皮を使って今の型にしたのも被差別民だったと語り、三味線奏者は人間国宝になれても革を作る人はなれない。それはおかしい。皮があつての三味線でしょうと言い、理由のない差別、これが人権問題だと気づいてもらえれば幸いと結んだ。



津軽三味線ユニット「来世楽(らせら)」

続いて、女性 2 人の津軽三味線ユニット「来世楽(らせら)」がコンサート。京極流師範「京極あつこ」「京極ゆか」の 2 人は、津軽民謡『十三の砂山』や『津軽りんご節』『黒田節』『串本節』など力強い演奏を次々に披露。前奏が自由という津軽だけのルールも紹介し、『津軽あいや節』や『ソーラン節』など、演奏だけでなく歌も披露。観客に囃子(はやし)や手拍子などでの参加をうながしながら演奏。最後は『花』を熱唱した。

市民のつどい 2017・ふれ愛講座

(蓬莱体育館) 平成 29 年 11 月 3 日(金)